

カンボジアにおけるベトナム系住民の子どもと学校

萩巢崇世

おぎす たかよ / 名古屋大学大学院国際開発研究科学術研究員、AA研共同研究員

日常的に越境を繰り返すトランスナショナル家族にとって、学校は子どもをめぐる最大の関心事である。カンボジアに住むベトナム系住民の子どもと学校の複雑な関係を探ってみた。

カンボジアのベトナム系住民

ベトナム系住民は、17世紀以降現在のカンボジア領に定住するようになり、フランスによる植民地支配下ではカンボジア統治政府の官僚としても登用されていた。フランスからの独立運動として湧き上がったナショナリズムは、「クメール人（カンボジア人）」の国家を建設しようとする運動であり、したがって少数民族、特にベトナム系住民を排除しようとする動きにもつながっ

た。この動きは1953年の独立後に強まり、約150万人が死亡したとされるポルポト政権（1975年4月～79年1月）下では、ベトナム系住民の大半が国外追放となるか、虐殺の対象となった。しかし、ベトナム軍の支援を受けたカンブチア民族救国統一戦線によってポルポト政権が倒されると、以前カンボジアに住んでいた人々が帰還するとともに、新しくカンボジア領に移り住むベトナム人も現れ再定住が進んだ。ただし現在も国民の反ベトナム感情は根深く、ベトナム系住民は行政的にも他の少数民族とは異なる不利な扱いを受け続けている。

無国籍のベトナム系住民

通常、7年以上カンボジアに居住することやクメール語の読み書きができることなどの条件を満たせば、外国人が帰化してカンボジア国籍を取得することが可能である。お笑い芸人の猫ひろし氏も、こうしてカンボジアに帰化して、2016年にはマラソンのカンボジア代表としてリオオリンピック出場を果たしている。しかし、ベトナム系住民の多くはポルポト政権崩壊後の混乱の中でカンボジアに移住しており、そもそも

パスポート等の公的な書類を持っていないことに加えて、先に述べた行政的な制約により、ポルポト政権崩壊後に移住した移民第一世代の多くが帰化を認められず、「不法に滞在する外国人」としてカンボジアに居住している人々も多い。その結果、移民第二・第三世代である彼らの子どもや孫は、ベトナム国籍もカンボジア国籍も得られず無国籍状態に留め置かれるという空白が生じている。その多くは、ベトナムに繋がるメコン川とトンレサップ湖の河岸や水上にコミュニティを作って生活しており、その数は20万人以上と見積もられている。

無国籍の子どもの就学状況

カンボジアの小学校就学率は、政府発表の統計によれば約95%である。だが数万人に及ぶ無国籍のベトナム系の子どもはこの母数に含まれず、あたかも存在しないものとして扱われている。カンボジアの学校教育はクメール人の国家を支えるクメール市民を育成することを目的としており、無国籍の子どもを受け入れる法的責任はないためである。また、ベトナム政府としても、海外子女教育はあくまでベトナム国籍を持つ子どもを対象としており、ベトナム国籍を持たない子どもたちはその対象外である。そこで、筆者は、ベトナムと繋がるメコン川流域及びトンレサップ湖沿いにある4つの村でフィールドワークをおこなった。

調査時点でベトナム系住民の学齢期の子どもは移民第二・第三世代で、そのほとんどが上記の理由で無国籍だった。子どもの就学状況はコミュニティや家庭の状況によってばらつきが見られた。メコン川沿いの地上に形成されたA村では、村長によって発行された暫定的な書類により、無国籍の子どもでもカンボジアの公立小学校に通学しているケースが多数観察された。同様に、トンレサップ川の水上にあるB村では、陸地にある公立小学校が特別に無国籍の子どもを受け入れていたというのが、数年前の強制移住により学校が遠のいたため、現在就学している子どもは皆無であった。トンレサップ湖の湖岸に形成されたC村では、親が村長に賄賂を渡して住民カードを入手し、陸上の公立小学校に通う子どももいる



4歳から15歳くらいまでの120人以上の子どもたちが学ぶA村のベトナム学校。



*写真はすべて筆者撮影。



約4000人のベトナム系住民が生活するB村。川の兩岸にボートの家が並ぶ。

ということだが、村の子どものほとんどが就学していない。トンレサップ湖上に浮かぶ水上のD村は、陸からボートで約2時間の距離を水の流れにのって浮遊しており、子どもが通える距離に公立小学校はない。また、すべてのコミュニティにおいて、無国籍の子どもが小学校から中学校、高校へと進学したケースはなかった。

ベトナム系住民は、一時的な解決策として、彼らが「ベトナム学校」と呼ぶ寺子屋式の無認可の学習施設に子どもを通わせ、最低限のベトナム語と計算を学ばせていた。ベトナム学校はコミュニティの中に作られ、少額の月謝を集めてコミュニティの識字者が独自のカリキュラムで教えるというスタイルである。子ども一人当たり平均して2年から3年ベトナム学校に通わせ、カンボジアの公立小学校への入学のチャンスを窺うケースが多い。

統計資料がないので正確な数は不明だが、カンボジア公立学校に通わせているケース（ベトナム学校にも並行して通わせている場合を含む）が1割、ベトナム学校のみに通わせているケースが約7割、残り約2割は公立の小学校とベトナム学校のどちらにも子どもを通わせていないケースという状況のようだ。

学校に託す願い

無国籍の子どもを持つ親にとって、子どもを公立学校に就学させるには大きな負担が伴い、運良く小学校に入れてもその先はない。それでも、どの親も子どもを学校に通わせたいと口を揃える。それは、学校に通って卒業証書という公的な書類を手に入れ、なおかつクメール語の読み書きをマスターするというのが、カンボジア国籍を取得するほとんど唯一の道だからである。例えば、B村に強制移住させられ、無国籍のまま3人の子どもを育てている父親は、以



水上に浮かぶC村のカトリック教会。併設の青い建物がベトナム学校である。仏教国カンボジアにあってもベトナム系住民の多くがキリスト教を信仰している。



朝の通学風景。往復10円のボート代を払えないために学校に通えないという子どもも多い。

下のように述べている。

できることならばもう一度子どもたちを前の小学校に戻してやりたい。クメール語を学べば国籍が取れるかもしれないと聞き、たとえ国籍が無理でも将来良い仕事に就いて高い給料をもらい、家族を助けてくれるという道が開ける。今は[退去命令により]学校が遠くなって通わせることができないので、しかたなくベトナム学校に通わせているんだ。せめてベトナム語の読み書きだけでもできれば、こちらに進出しているベトナム企業に就職したり、ガイドや通訳になったりもできるだろう？

たとえ中学校に進めなくても、クメール語をマスターできれば、いつかはカンボジア国籍を取得できるのではないかと。国籍を取得できれば、安定した仕事に就き、土地を買って陸地に住み、普通の暮らしができるのではないかと。こういう期待があるから、

親は多少無理をしても子どもを学校に通わせたいと願うのである。対照的に、ベトナム学校は生活に役立つ実用的な知識を学ぶ場であり、最低限でも子どもに教育を受けさせたいという親の願いが託されている。

越境する子どもと学校

ベトナム系の子どもたちは、自分では越境を経験していないが、日々目に見えない境界を意識しながら生きている。彼らにとっては学校も境界である。なぜなら、ベトナム系住民にとっては、カンボジア国籍を獲得し普通の暮らしを実現するためのほとんど唯一の道だと認識されている学校だが、現実には、その国籍が理由で子どもたちの就学機会が狭められ、無国籍状態に留め置かれる状況が続いているからである。この事実、そもそも「国民」教育の場として制度化されてきた近代学校教育制度の限界を実感させるだけでなく、学校の意義やあり方を根本から考え直す可能性を暗示しているようにも感じるのである。